

不可逆から治療可能な病態へ ～CKD診療の新時代～

山本伸也

京都大学大学院医学研究科腎臓内科学

世界では腎疾患を有する患者が8億人を超え、慢性腎臓病（CKD）は、糖尿病や心血管疾患と並び世界的に重大な健康課題と認知されるようになりました。腎臓病に関する病態理解が進み、新規薬剤が次々と開発され、腎臓病診療がパラダイムシフトを迎えています。このような背景から、CKDは、従来考えられていた“不可逆的に進行する疾患”という位置づけから、“早期介入により予後改善が可能な慢性疾患”へと捉え直されています。その潮流を受け、2023年には日本腎臓学会から『CKD診療ガイドライン』が、2024年には『KDIGO CKDガイドライン』が改訂され、CKD臨床の変革に目が離せません。

本特集は、CKDの基礎から臨床応用までを体系的に解説し、実臨床に役立つ知識とスキルの習得を目的としました。最新の知見や臨床現場での具体的な症例を盛り込むことで、実践的な内容となっています。特に、CKDの全体像を理解する総論から、糖尿病や心疾患、血液疾患、がん、COVID-19、遺伝疾患など、多岐にわたる臨床場面における各論まで、幅広く網羅しています。さらに超高齢社会におけるマネジメントや、最新の薬物療法、腎毒性物質のアップデートも取り入れております。CKD診療において日々の課題に直面した際、身近な参考書として多くの先生方に手に取っていただけることを願い、『慢性腎臓病大全』と名付けました。本特集が、皆さまの診療の一助となり、患者さんのQOL向上と適切なコンサルテーションを実現し、より良い患者ケアにつながることを心より願っております。 



柳田素子

京都大学大学院医学研究科腎臓内科学



CKDは単一の疾患ではなく、原因疾患、併存症、進行様式、治療反応性が大きく異なる症候群です。CKD治療薬として承認されたSGLT2阻害薬は、CKDの原疾患を問わず使用可能であり、かつ腎予後を改善する点で極めて有用です。その一方で、CKDの原因疾患別の治療も整備が進みつつある昨今では、CKDの原因疾患を可能な限り正確に診断し、病態に即した介入を行う重要性が改めて認識されています。原因に基づく診断は、治療選択のみならず、病態解明研究の深化と新規治療開発の基盤ともなります。今やCKD治療は原因疾患に基づく視点と、原因疾患横断的な病態を捉える視点の2軸で考え、「誰に、いつ、どのように介入すべきか」を見極める時代へと移行しつつあります。

さらにCKDは、腎臓に限局した疾患ではなく、心血管疾患、代謝異常、がん治療、感染症、高齢者医療などと深く結びついた横断的病態とも捉えられます。他臓器疾患の診療過程で出現する腎障害は、しばしば治療選択や予後を左右し、その評価には全人的・統合的視点が求められます。その接点において、腎臓医は疾患横断的な病態理解を担い、診療科間をつなぐ“ハブ”として機能することが期待されています。

本特集では、CKD診療の第一線で活躍されるとともに、病態解明においても世界をリードする先生方に執筆いただき、CKD診療の実際と課題、将来展望をさまざまな角度からあますところなく、取り上げていただきました。本特集が、日常診療と病態解明研究の双方において、次の一步を考えるための一助となることを願っております。 